

白金葎

9月号



平成27年9月発行

第55号

白金葎定例会句会案内

十月十六日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三 兼題：秋思、落鮎

十一月二十日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第四 兼題：酉の市、大根

十二月十八日(金) 12:00 ~ 15:00 ミビアン 兼題：冬夕焼、すき焼

愁思、落鮎の参考句 (十月十六日分)

この秋思五合庵よりつききたる

女性専用車みな秋思のそぶり

贅沢な時間秋思の只中に

秋思とは真正面の世界地図

白樺の林に立ちて秋思かな

頰杖に深き秋思の観世音

下り鮎尾の先となり後となり

漆山染まりて鮎の落ちにけり

落鮎やダム満々と雲の色

落鮎の夕日を引いて釣られけり

築を逃れし落鮎に早瀬待つ

鮎落つや堰にひろげし袋網

もどり漁の取材落鮎あまた入る

鮎落つる時折流れより速し

落鮎の丸きお腹を見てしまふ

月例会句会報 (15 / 9 / 18 9名欠1) (芋嵐、衣被)

飯田孝三

芋嵐土間内かまど吹きこぼれ

コスモスや女先生をんなせんせい岬の子

教科書の子規の横顔衣被

犬連れていつも来た径芋嵐

芋車くるくる子規忌来る明日

増田陽一

裏見せず月は行くなり衣被

琉球弧不喰芋にも芋嵐

秋雨の蛾は羽搏きて地を滑る

肌寒や出水を回るへりコプター

瞑れば眼圧重し秋の海

光成高志

芋嵐墓地を求めて西東

「吾日本文化を愛す」の碑秋の蟬(タウトの碑)

台風過暁星座よく見える

衣被食ふ禿頭に味噌塗つて
芋嵐この葉火男ひよつと踊る如

風神の笑つてをりぬ芋嵐

留守の間に庭の穂蓼の勢かな

手付かずの貝塚ありて栗実る

椽側の客にもてなす衣被

芋嵐帽子の鍔の翻る

筑波嶺のけふよく晴れて芋嵐

秋夕焼どこへも行かず誰も来ず

芋嵐一番電車通りすぐ

三婆と言はれ縁側衣被

芋嵐人の心の裏表

コスモスの赤黄にあふるちひろの絵

山塩と海の塩添へ衣被

光 みち

聖人の三人は幼な秋の声（長崎二十六聖人）
芋嵐飯やの魚拓吹きあぐる

芝居はね手酌で待つや走り蕎麦

十一面観音十一面の秋

永らへて命が熱し瀬祭忌

早稲の田の手刈りも見ゆる我孫子かな

恋ひつつも無頼に遠し芋嵐

瀬祭忌律に日記のなかりけり

吉羽多美子

芋の子や指の先から跳んで出る

凌霄花散り敷く坂の夜の雨

終戦日子らさくさくとリンゴ食む

日がな一日土鳩の声する秋彼岸

芋ばかりなる日々もありけり遠き日々

倉田紀子

土の中吹き去りを待つ芋嵐

松村幸一

武者昭七

浅野正美

砂浜に子ら集ひて花火の輪

芋嵐皮むくほどにのぞく白

衣被供へて偲ぶ十七忌

手花火や手を添えみつめ火玉かな

青木啓泰

軍隊が見えてくるなり秋の風

秋風やさやかにあらず音連れて

市と村の境で会へる芋嵐

台風接近水家でほおぼる衣被

種のない葡萄の皮を口で吐く

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

5 山塩と海の塩添へ衣被

5 留守の間に庭の穂蓼の勢かな

4 終戦日子らさくさくとリンゴ食む

4 教科書の子規の横顔衣被

4 癩祭忌律に日記のなかりけり

3 筑波嶺のけふよく晴れて芋嵐

3 聖人の三人は幼な秋の声（長崎二十六聖人）

多美子

紀子

3 風神の笑つてをりぬ芋嵐

3 芋嵐土間内かまど吹きこぼれ

3 芋嵐土間内かまど噴きこぼれ

2 芋嵐この葉火男踊る如

2 コスモスに吹かれ女先生をんなせんせい岬ツ子

孝三

2 コスモスや女先生岬の子

2 衣被皮むくほどにのぞく白

2 芋嵐飯やの魚拓吹きあぐる

2 秋夕焼どこへも行かず誰も来ず

2 凌霄花散り敷く坂の夜の雨

2 椽側の客にもてなす衣被

2 犬連れていつも来た径芋嵐

2 軍隊が見えてくるなり秋の風

2 台風接近水家でほおぼる衣被

2 裏見せず月は行くなり衣被

2 芋嵐帽子の鏝の翻る

2 芋の子や指の先から跳んで出る

2 衣被食ふ禿頭に味噌塗つて

2 琉球弧不喰芋にも芋嵐

2 琉球弧の不喰芋の芋嵐

2 台風過暁星座よく見える

2 手付かずの貝塚ありて栗実る

2 秋雨の蛾は羽搏きて地を滑る

みち

孝三

高志

孝三

正美

紀子

多美子

昭七

みち

孝三

啓泰

〃

陽一

みち

昭七

高志

陽一

高志

みち

陽一

1 肌寒や出水を回るヘリコプター

1 種のない葡萄の皮を口で吐く

1 芋嵐人の心の裏表

1 恋ひつつも無頼に遠し芋嵐

1 三婆と言はれ縁先衣被

1 三婆と言はれ縁側衣被

1 市と村の境で出合いし芋嵐

1 市と村の境で会へる芋嵐

1 芋ばかりなる日々もありけり遠き日々

1 土の中吹き去りを待つ芋嵐

1 コスモスの赤黄にあふるちひろの絵

1 「吾日本文化を愛す」の碑秋の蟬（タウトの碑）

1 暎れば眼圧重し秋の海

1 砂浜に子ら集ひて花火の輪

1 早稲の田の手刈りも見ゆる我孫子かな

1 日がな一日土鳩の声する秋彼岸

1 日がな一日土鳩の声の秋彼岸

1 芋嵐一番電車通りすぐ

1 秋風やさやかにあらず音連れて

1 芋嵐墓地を求めて西東

1 衣被供へて偲ぶ十七忌

1 永らへて命が熱し癩祭忌

啓泰

多美子

幸一

多美子

啓泰

昭七

正美

紀子

高志

陽一

正美

幸一

昭七

多美子

啓泰

高志

正美

幸一

正美

幸一

正美

正美

芝居はね手酌で待つや走り蕎麦

十一面観音十一面の秋

芋車くるくる子規忌来る明日

一句鑑賞

一句鑑賞

芋嵐土間内かまど吹きこぼれ

芋嵐の季語は阿波野青畝の「案山子翁あち見こち見や芋嵐」から生れたらしい。芋の葉がざわざわと波立ち、

白い葉裏を見せて揺れ動いている程度の秋風をいう。そ

ういう風の吹いている土間の竈では御飯炊きの最盛期

の白い泡が吹き零れている。さて朝餉か夕餉かと思いつ

つ、田舎の風景を思い出しながら〇をつけた。自句自解

の開口一番「露けしや朝餉の竈火見てあれば」（高志）

を敷衍したと言われた。その時、自句を正確に思い出せ

なくてどうも失礼しました。朝餉の竈火でした。薪を竈

まで運ぶのが私の役目であつた遠い昔。

「芋嵐飯やの魚拓吹きあぐる」（紀子）は幸一さんと合

点しあつた浦安の飯屋の記憶でありました。両句共「吹

き」の措辞が芋嵐に通じているのです。

終戦日子らさくさくとリンゴ食む

終戦日に子らはリンゴをさくさくと噛んで食べてい

る。なんの屈託もなく。「柿を食う君の音またこりこり

と」（誓子）をどうしても思い出した。だが、北原白秋

紀子

幸一

孝三

孝三

光成高志

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

孝三

に「君かへす朝の敷道さくさくと雪よ林檎の香のごとく
降れ」があつて、これが本歌であるとか。内容は全然違
つて、ただ詞を拝借して、本歌を換骨奪胎した俳句であ
る。今筆者は、近世の貞門から談林俳諧を見ているが、
基になる歌や謡曲や諺などがあつてそれをもじつたり
言寄せしたりつまり寓言したりしたものゝ殆どである。
古典の知識が不可欠であつて、学問の一つのジャンルと
なつていたのだ。現代俳句でもそういう分野の俳句は廃
れないと思う。文学に造詣の深い昭七さんならでの句で
ある。

衣被皮むくほどのぞく白

正美

衣被きぬかつぎとは、里芋の子を皮付きのまま蒸すか、ま
たは茹でたもの。平安時代に高貴な女性が外出すると
きに頭からかぶるもので、単ひとえ小袖を用いる。衣被を
かぶつた様子が、芋の周囲に二八の割合で包丁目を入れ
上部の皮をむいた形に似ていることから名付けられた。
かつぎとは担かつぐからきたもので、頭にのせる、かぶる
の意味。掲句は皮付きのままの衣被を剥くほどに白い芋
の肌がのぞいてくる印象を「白」と切つてその余韻に感
動をしのばせた。切れの効果だ。今年の芋名月は二十七
日、それまでには本誌を届けたいが。

琉球弧不喰芋にも芋嵐

陽一

九州の南から台湾に近い日本最南端の島までは

本州の長さに匹敵する島嶼とうしよが弓なりに連なつてい
る。これらの一連の島を琉球弧と呼ぶのだ。その島々に
生える喰わず芋にも本州と同じく芋嵐が吹いている。琉
球弧といい、喰わず芋といい、その名前からして悲哀の
韻きがあるが、これも日本だからという作者の優しい思
いやりが、食わず芋にも琉球弧の島々の人々にも、特に
沖縄の人々に注がれている句と見ました。

一句鑑賞

飯田孝三

三婆と言はれ縁側衣被

多美子

「三婆」は現代の媼三人、いや、少々時は遡るかもし
れない。明るい秋の日がさす縁側で白妙の舌触り楽し
みながら、談笑を交わしているのである。はて、と「云
われ」の含意が気にかかる。臍ならん。文芸では、一
方で「三人姉妹」なんて囃したりするけれど・・・、言わず
読み手に任せるあたり、熟年の余裕、また奥ゆかしさで
ある。戦中戦後いつ時の祖母らの談笑情景が目に見え
る。
芋嵐この葉火男踊る如

高志

里芋や八頭の葉っぱ広葉で大きい、風で煽られ、大仰
に裏返り、裂けたりもする。その態さまはまるで里祭の火
男踊りだというのだ。ウィット溢れて面白い。く「踊り
かな（哉）」だといはいかぬ。く「踊る」がありあり

目に物見せるのだ。「如」は「こと」もありうるが、その視覚効果より、句の立姿の男ぶりを選べるあたり、誓子直伝、「天狼」の面目である。

種のない葡萄の皮を口で吐く

啓泰

葡萄といえはワイン？いや、人間まづ口にしたのは、房をまることはたまた粒々。いらい種を吐き吐き、葡萄を吸いつつ幾千年。はて、改良重ねた種なし葡萄、むぐむぐふむふむ、なにやら頼りない、皮はやっぱり吐かにやならぬ！どだい猿知恵（失礼）、五十歩百歩、面倒。あえて措く「口で」が絶品、今し口籠る口もとが目に迫るのである。

山塩と海の塩添へ衣被

紀子

「山塩」は、太古、海底が隆起し堆積した山中の地層から産する塩。別名岩塩をいわぬ、「山」塩と「海」の併称が眼目。平成は美味喫賞の世相をかたへに、遙か平安の世より馴染み、白妙は衣被のやわ肌の滋味、旨味をめつつ、うまし国ぞ、あきつ島大和の国は、青垣山ただなひ、鷗立ちたつ・・・ふつと、古人の国讃にほめ、海山讃仰の昔に思いを馳せるのである。

留守の間に庭の穂蓼の勢かな

みち

炎天一転、秋長雨のあとの晴天である。束の間の留守に、庭草がはびこり、頭ぬけて、勢い立つ蓼の穂群れに、一瞬、目を奪われる。結「勢かな」がずしり。いえぬ万

感の胸裡が見てとれよう。別に「風神の笑つてをりぬ芋嵐」、楼門前、一面芋畑の葉つばが大揺れだ。かくして夜をこめ、日すがら芋は育つ。尤も笑いは、モナリザの微笑もとより、苦笑、哄笑、はたまた艶笑、てれ笑、いづれとるかば読み手のご自由。中七切れ「をりぬ」の含蓄が面白い。

終戦日子らさくさくとリンゴ食む

昭七

「さくさく」は云うまでもない咀嚼の擬声音、ここは酸鼻を極めた戦の果てのささやかな平穩の表象。因みに林檎の香の雪の触感を添えようと、白秋は不倫の朝あしたの歌になるが、「終戦日」に無垢の「子ら」を配する。末尾「食む」の営みが切なくも深甚。焼跡の巷に流れた「リンゴの唄」を踏まえる由、カナ書の平仄も行き届く。戦を知らぬ子らの代の平和を願うのは皆同じ。

衣被皮むくほどにのぞく白

正美

衣被は初め頭^{むり}の先の衣をちよつぱり剥いて、つるり指先で口にくふませる。さすれば、きつと、最初に皮をむく隙^{いとま}に現れてくる、滑らかな白身の肌を目にとめた感銘を詠み止めたものだろう。一見、さりげなく、修辞「白」がはたと眼を射る。中七下五にかけてのかな書きも用辞ゆき届き、観察の細やかさを覗かせる。「ほどに」は、その時、瞬間の意、次第ではない。

癩祭忌律に日記のなかりけり

幸一

子規があればほどの大病で、文芸史に輝く大業を成しえたのは、妹律のお蔭。当人は包帯交換の度などに大声で泣き叫ぶやら、悪態を言いたい放題だったようだが、兄の偉業に免じて瞑目して貰いたい。それにしても、子規は歌句、歌論句論、克明な病床日記を残したが、なんと律には何も無い。余談だが、癩までもが、ついに足跡が消えてしまった、外連ない「けり」の切れ味が要。

琉球弧不喰芋にも芋嵐

陽一

琉球弧は琉球諸島の島々。最初、弧状に散在する列島の目視位置が絞れなかったものだが、度々、実地を踏まれた陽一さんのひと言で、地勢、風土が一体となって立ち現れる。芋は熱帯、亜熱帯原産の根菜、喰わず芋は湿地に野生し食用には適さない。一帯の芋野原、芋畑に芋嵐が吹きわたるのである。沖縄の社会・政治情勢を暗示するかの光景が目に見え浮ぶ。

(出句一覽掲載順)

(平成 27・09・22)

一句鑑賞

武者昭七

裏見せず月は行くなり衣被

陽一

芋名月の季節。衣被を盆に盛ってお供えする。月は天心に移り、やがて西に傾く。しかし月はいつも同じ側しか見せてくれない。月はもう一つの顔を誰にも知られな

いままに天空を移ろうて行く。昔から身近な友でありながら常に一面を秘めたままの月。作者はそんな月になんを見ているのか黙して語らないけれど結句「月は行くなり」にひとり天空を行くものの寂寥と孤高の響きがある。人の生を重ね合わせているのである。

椽側の客にもてなす衣被

みち

エンガワはかつてどの家にもあった。座敷と庭をへだてる細長い板の間である。座敷に招き入れるまでもない身近で親しい客はたいしていそこでもてなした。客も顔をほころばせながら庭をつききって飄然とやってきては打ち解け話などしてまた飄然と帰って行った。客のほうも「すぐ帰りますからここで結構」なんて言いながら腰をおちつけて・・。そんな交歓の場がエンガワだった。そんな客のもてなしはたいして自家製の身近なものだ。折から里芋の季節。畑からとってきたばかりの新芋はどんなお茶受けにも劣らない最高のもてなしだ。「まあ、おいしいわア!」そんなエンガワの賑わいが聞こえてくる句です。

犬連れていつも来た径芋嵐

孝三

愛犬連れていつも来たこみち。愛犬は逝ってしまった。我が身を吹き抜ける芋嵐は無常迅速の嵐。喪失の悲しみが静かな口調からにじみでてくる。

秋夕焼どこへも行かず誰も来ず

多美子

秋の一日、出会ったものは夕焼け空だけ。ぽつんとひとりすごしてしまった。しかし、たしか兼好法師が言っていました。「ただひとりまぎるることなくあるべき」とか。

軍隊が見えてくるなり秋の風

啓泰

戦後七十年コツコツと積み重ねてきたもののはなんだったのか。これからこの国は何処へ行くのか。暗澹たる思いがする最近の世相。昔耳にしたあの重い軍靴の響きがまた聞こえてくる気がします。

一句鑑賞

増田陽一

凌霄花散り敷く坂の夜の雨

昭七

夏早く咲きだして『暑』のイメージのようだった橙黄色の花が散り、雨に濡れて夏の終りを告げている。『坂の夜の』と、念入りだけれど、この畳みかけた描写によつて季節の終りの情感が濃密に表現されているのである。

瀬祭忌律に日記のなかりけり

幸一

子規は病苦の中で細密に日常の記録を残しているけれど、彼を看護し、極限状況の中での文筆活動を可能にしたのは妹律の献身があったからこそであろう。凡そ日記をつける余裕もなかったであろう律の苦闘を虚の表

現によつて浮かび上がらせる俳句形式の巧妙な作用。先人の類句が無いとすれば、絶対に名句である。

台風過暁星座よく見える

高志

台風一過、空の澄み切った暁をねらつて起き出して星を眺める、などかなりマニアックな行為であろう。既に早朝に星を見る気力を失くした僕などにはとても羨ましい境地である。恰も今朝の新聞には

十月9日午前4時40分頃。月と金星火星木星の接近。
十月26日午前4時56分頃。金星と木星火星の接近。
などと、僕の怠惰をからかう如く予告されている。
留守の間に庭の穂蓼の勢かな

みち

植物の伸びる勢いの凄まじさに圧倒されるときがある。ここでは夏の終り、暫く見なかったときの庭の野草の伸びである。人間の不在を見て、植物はここぞと野生を主張するのである。穂蓼というのは何の種類の。オオケタデなどは2mにもなるそうである。

コスモスに吹かれ女先生岬ッ子

孝三

(コスモスや女先生岬の子)

() は句会での論議で変形した形である。どちらにしても「女先生」には「オンナゴセンセ」とルビが振つてあり、瀬戸内海の小島、映画の舞台では小豆島で、戦前の女性教師をやや珍しい眼で見た土地柄も現れてをり、この言葉が句の眼目になる。言うまでもなく壺井栄

の原作で木下恵介監督、高峰秀子主演の映画「二十四の瞳」である。改作例では定型に収まったけれど、初案での作者の求めたニュアンスも理解できる。例えば「吹かれ」は初心の少女教師が受けた僻地からの抵抗感を現している。両方をならべてみた。

秋夕焼どこへも行かず誰も来ず

多美子

独りで家に籠っている女人。外出のあてもなく、訪れてくる人もない。と言つて、淋しいわけではなく独り居て内面的に充実している、その矜持のようなものが、きつぱりした表現から感じられる。外は壮麗な秋夕焼。聖人の三人は幼な秋の声

紀子

「長崎二十六聖人」の前書から、彫刻家舟越保武の「長崎二十六殉教者記念像」と知れる。大理石の端正優雅な像で、その三人は幼子だというのが憐れ誘う。ひと頃、「新制作協会」彫刻部で、リアリズムの佐藤忠良と競い、この聖人像が毎年一点づつ出品されていた記憶がある。殉教者の祈りが秋の声である。

ハガキ句（54報）管見

飯田孝三

水あれば水に沿ひ行く桜かな

高志

水は、”流れる”。地中、地表を潤し、大気を循環する。太古、水中に万物のいのちが生まれてから続く、弛みない自然の営みである。人も花もその摂理に従い、い

のちを次代に引き継ぐ。花は、やはり桜だ。花の盛りと飛花・落花の悲愁を、人の世の栄枯盛衰に擬えて嘆ずる文芸はあまたあるが。悠久の自然の摂理の中でこれを捉えた作品は知らない。「水」は、句の導入部ではなく、主役。「桜」は、これに添う「物」のいのちの「表象」とみるべきだろう。十七音、余白の詩が抱える時空は大きい。花堤を行くか、遊船の花見か、眼前の情景を伝えるだけではない。さりげない客観の措辞「沿ひ」がこなれ、作者の無量の思いを宿す。句の臍である。「天の川水車は水をあげてこぼす」（展宏）。

方舟の隅に居りたる蝸牛

璃子

ノアの方舟である。神が悪に満ちた世界を絶滅すべく洪水を起こした時、神の恩恵を得てノアが作製し、家族や各動物一つがいと共に難を避け、アララト山に漂着したという（旧約聖書・創世記6〜8章）。舟中糝しめき合い、空恐ろしい避難航だつたろう。蝸牛として同舟。しかも、雌雄同体のひとりぼっちだ。俳句の季語やらにも、「蝸牛鳴く」とは聞かぬ。さては、泰然、シエルターに満を持したか。「居り」の存在感、「ゝたる」の驚きの発見が、共々、飄逸。「ゝ隅に」がその習性をまざと目に見せて面白い。

「思考するデュシャン」にあらず寢酒かな

陽一

女性に衣裳着せたり、脱がせたり、それが絵画の歴史

だという。それまで神話に拠り、理想の女性美を追っていたヌード絵画に、初めて、娼婦を登場させたのはマネだが、芸術の聖域に日用の男子用小便器（標題『泉』）を持ち込んだのがデュシャンである。こちらは芸術の衣裳を剥いでしまった。美術の権威筋は面喰らっただろう。マルセル・デュシャン。コンセプチュアル・アート、オブ・アートなど現代美術の先駆として、20世紀美術に決定的な影響を残したといわれる。伝統芸術を懷疑し、難解な「觀念としての芸術」を「思考するデュシャン」は、彼の創作活動の謂いだろうか。邦題『泉』は『噴水』の誤訳とも伝えられ、又、よく知られる一つ、『モナ・リザ』に髭を加えた作品の名『L. H. O. O. Q.』はアルファベット読みで、*Elle a chaud au cu.*（彼女の尻は熱い）と同音。後半生の作品、通称《遺作》は、性的ファンタズムと彼が、以前、批判した（網膜的）楽しみに満ちているという。衣装は変われど、ヴィーナスの神は普遍か。

閑話休題。ともあれ「思考するデュシャン」を尻辺に、泰然、「寢酒」きめこむ飄逸が面白い。作者が画家ならではの作である。気がついて見れば、この句は無季だ。敢えて、季語を借りるまでもない感興の一句だと思ふ。
豌豆や歯並び健康優良児

小生も、高志・敏子さん夫妻から、摘みたての豌豆を

敏子

いただいた一人。莢を剥いだとたん、はち切れんばかり、びつしり詰まった実に目を瞠った。「うや」が利き、何よりも「歯並び」がいい、一句の中から立ち上がる。作者は、長年、児童教育の現場で働かれた。同じシーンで、打坐即刻に閃いたのが、「皓齒一列」の健康優良児らの笑顔だった。誰彼の無垢の笑顔が弾ける。眼目、「歯並び」が齧たらす有無をいわせぬ視覚効果に喝采。

山峡の底に街道桐の花

ひろし

山腹から、前景「桐の花」の下に山峡の街道を俯瞰する。作者が桐の花咲く山間の街道を行く、ともとれるが違うだろう。「う底に」が、山峡の景を大きく切り取る視野に、くつきりと、一筋の街道を焼きつける。桐の花の淡紫と山峡の緑と、梅雨に入る前、一時季の美しい光景である。

赤坂の風に色あり一の午

かづひろ

赤坂は、豊川稲荷界隈の風景である。広い境内に林立する朱色の幟旗が風になびく。「う風に色あり」が一带の空間を取り込む。

竹の秋武蔵野線を通しけり

春美

武蔵野線の開通間もない頃、ちよくちよく、南浦和・新松戸間を利用した。南には、関東では少ない穀倉地帯の水田が広がる。車窓から、ときに、芭蕉が食べただろう草加煎餅や、「野菊の墓」、「土」の舞台などを思った。

閑話休題。東川口・新越谷にかけて、台地から水耕地に移る辺りでは、小さな里山が島のような浮かび、豊かな地下水が竹を繁らせる。「く通しけり」の擬人は、その間をゆく軌道（或いは電車）を鳥瞰した図だろう。因みに、「竹秋の武蔵野線を通りけり」ならば、通ったのは作者になる。

蚕豆や莢の丸みは実の丸み

敏子

中七下五の弾むリズムに実感があり、面白い。ただ、「丸み」となると、小粒だが、はち切れそうな豌豆が先に来る。先日、いただいた豌豆の印象が強い勢かも知れない。「蚕豆」では、作者の旧作「蚕豆の殻に親指入れてみる」を思い出す。

蛇の衣懸かる泉水蓬萊島

高志

「蛇の衣」、「蓬萊島」と重なると、めでた過ぎる気がする。（駄句近作）

牡丹や葉末風あり風なかる

ゴッホ見て氷旗渋谷文化村

先日の「豌豆のく」の推敲です。

「豌豆の円ら列列はしきやし」

以上

俳窓評論纂

*幸一さんから「復権」というエッセイのコピーを頂いた。「屋根」七月号に掲載されたものである。何が復

権かというところ、二〇一二年に内館牧子の「十二単衣を着た悪魔」という小説で源氏物語の弘徽殿女御を書いたところが、人間的復権を果たしたとして快哉を叫んだという。幸一さんは最近また源氏を再読されそれが四十四回目の読返しとか。読書家の幸一さんなら、そういう読み方もされるだろうと思いました。源氏と玉蔓の物語論が「蛭」にあります。が、「いつわり馴れたる人はさまざまにもくみはべらむ。」と言って玉蔓は物語はみなほんとのことと思って読んでいると答える。本居宣長はこれを「君子欺くべし」という論語の意に通じるという。君子はすぐ欺かれる。そういう素直な心で読まなければこの物語は分るはずがないというのである。光源氏は紫式部が描いた歌の実際の理想であるとも云う。源氏物語を愛して信じ楽しんだ人のみが式部の心に触れられるのだという彼の論、いやここは小林秀雄であったか、幸一さんは九十代になられてもこのようなころばえをお持ちの君子である。

*朝日のBe版でブルーノ・タウトの「洗心亭」が高崎の達磨寺にあることを知り、飛んで行ってきた。何故というに、私の今の人生を作ったきっかけになった人だからだ。高三の秋、国語の教科書に載った永遠なるもの「桂離宮」というタウトの文章の訳文を読んで、学部選択を迷っていた時の光明であつたからだ。大学に入って学部

行く前に修学院離宮と御所を拝観し、奈良に回って法隆寺などを見た。翌年に桂離宮を見た。それから今まで五十年以上の空白期間を経てこの度、タウトの思想にちよつぱり触れた。単純こそ一番いいのだ、自然と一体となる建築というのは、俳句の骨法に通じている。

*賀茂真淵の「国意考」の中にある以下の詞は俳句に通じると思うので、ここに書いておく。「凡天地の間に生きとしけるものは皆虫ならずや、それが中に人のみいかで貴く、人のみいか成ことあるにや、から人は人は万物の霊とかいひて、いと人を貴めるを、おのれが思ふに人は万物の悪きものぞといふべき、いかにとなれば、天地日月のかはらぬまゝに、鳥も獣も魚虫も草も木も、いにしへのごとくならぬはなきこと、人ばかり形もとの人にて、心のいにしへとことになれるはなし。人はなまじひに智てふ物ありて、おのがじし用ひ侍るより、たがひの間にさまぐの悪き心の出来て、終に世をもみだれ、治れるといへど、かたみに巧あざむきをなすぞかし、若天が下に一人二人物知ことあらん時は、よき事も有ぬべきを、人みな智あれば、いかなる事もあひうちと成て、終に用なき事也。今鳥獣の目よりは、人こそわろけれ、かれに似ることなかれと教へぬべきもの也」(小林秀雄本居宣長下p 159~160)

お便り広場(到着順、敬称略)

光成様 今日午後便で白金葎八月号が届きました。ありがとうございます。文中、みちさんのお身体の調子の異変を知り大変驚きました。心からお見舞い申し上げます。私よりお若く知的で行動的な方ですから思いもよらぬ事でした。しかもタイミングもお手当ても良く本当によろしかったですね。多美子さんには、八月二〇日無事退院のご予定と又細々と伺い安堵しております。光成さんもお疲れのことと思います。呉々もお身体を大切になさって下さい。みち様によりしくお伝え下さい。又、原稿はUSB等(出来る範囲で)利用するのはいかがでしょうか、ふと思いました。

(8・18倉田紀子)

前略、お電話でみちさんがあさって退院と伺い、胸を撫で下ろしました。私はたまたま白内障の手術の日でしたが、どこにいても汗が眼に沁みこんでくる暑さで、炎天寺の皆さんもきびしいことと案じていました。でも今日8月号の「白金葎」が届くまで、何事がおこったともツユ知らずにいました。しかしたかしさんも、大変でしたね。「詩の実」と「この世の実」の間をうつし心もなくわたり合う人間たかしの面目躍如たる、まことにモニユメンタルな8月号が創られた。私たちの年代になると、

この二股をかけて生きざるを得ない切実さをひしひしと体験させられる。死を思い命を思いつつ、そのかけがえのなさから詩の花を咲かせましよう。お互いに！
草々 (8/18夜 松村幸一)

高志様 奥様のご体調、順調に推移されていることと拝察いたします。昨日、白金葎8月号拝受いたしました。あの大変お忙しいなか、よくぞ編集されましたこと、驚きとともに恐縮する次第です。どうぞ、これからは奥様のご養生第一に、また、高志様もご無理なさりませんよう、お願いいたします。とりあえずお礼まで。
興正拝 (8・19)

敏子さんのご退院、おめでとうございます。よかったですね。何卒、予後をお大事にしてください。日頃、句会の手筈をつけたり、編集のお手伝いしたりなど、何かと、ご苦労、お気遣いが嵩んでいたのだと思います。十分に養生なさって下さい。病院からわざわざご退院をお知らせ下さいまして、有り難うございました。安心いたしました。高志さんには、拙稿の打込みや白金葎の編集はじめ、こんな時にまで、いろいろお煩わせして恐縮です。お疲れがどっと出るといけません。俳句の方はゆつくりやりましょう。さすがに、秋冷を感じるようになりますが、日が出ると、まだまだ暑い、どうか呉々も、お体に気をつけて下さい。白金葎八月号、嬉しく拝見し

ました。来月例会でのご夫妻との再会を楽しみにしています。ご退院 おめでとうございました。まづはお祝い申し上げます。

(8/20 飯田孝三)

前略、「白金葎」8月号拝受しました。何か奥様が大変のようでお見舞い申し上げます。小生も一年ぐらい前に朝方左腕が麻痺し、それは一時間くらいで消えましたが、それから後遺症が怖いのでインターネットで検索し、ドイツのシュワーベギンゴ社の銀杏の葉の製剤と納豆キナーゼを欠かさず飲んでおります。服用後の状況はかなりの頭がすっきりして、物忘れもかなり改善してきました。歳をとつてくると体が第一です。小生も父方の家系が脳疾患ですから心配です。出来るだけ気を付けてピンピンコロリになりたいものです。十六日にこれが最後と意を決し大文字を見に行ってきました。これからは何事も一期一会です。 草々

洛中のうかめ空気熱帯夜

(8/21 平野ひろし)

白金葎八月号頂きました。みちさんが急病の御様子良くなられてよかったですね。相当ムリをなさったことかと思えます。光成さんも少しはラクをして下さい。スープを送りました。(来週中旬以降になりましょう) 少しは手間をへらして下さい。近頃自費出版社は知りません。丸善あたりではしていると思います。郡司さんは製本だ

けで青写真屋さんにタノんださうです。冊数は多めに必要でしょう。くれぐれも御身体を御大切にして下さい。

(8・22 小山陽也)

敏子さんのご退院おめでとうございました。貴兄はもとよりですが、敏子さんご自身ほっとされたことと存じます。何と言ったて我が家ほどころはありませんどうぞ予後を大切になさって下さい。大変な最中に早々白金蔭八月号をお届け下され、有難うございました。拙稿の鑑賞に態々葉書まで添えられ、ご褒褒頂き面栄やぐ限りです。感謝いたします。陽一さんの「白雨」の句は、やはり、ゝ「去る」だと思います。その切り上げの外連なさが「いのち」だと思います。特に上中のイメージとリズムが混み合っている感じですので、切れ味に目を瞠りました。印象の際立つ一句でした。私の切さんにはご一笑いただけたら有難い。二稿の原稿をお届けします。大きさが不揃いで済みません。不器男についてのページ、加筆が多くなりましたので、大版にしました。又、一章を追加させて頂きました。いつも乍、ご面倒をおかけしますが、よろしくお願いいたします。ただし、ゆっくりやって下さい。さすが秋気が感じられますが、日が出ればまだまだ暑い。ご夫妻共々呉々も御身ご大切になさって下さい。

不二

光成高志さま

飯田孝三(H・8・21)

八月号白金蔭拝受ありがとうございます。炎天寺での句会、あの暑さの中での皆様のお句に、酷暑がまぎぐと感じとれました。その中にある涼しさを感じ取る俳人のひらめきを次の句に活写されていると思います。回栗の檜の木深き蔭つくる 高志

境内や涼しきものは塩地藏

陽一

奥様の突然のご発症でご心労の御事と存じましたが、ご経過ご順調の由、何よりと存じ上げます。思いがけぬ事態に適切な行動をお取りになられ、場処も炎天寺さんのお部屋内でしたとのこと、目に見えぬ力が良い方に働いたかと存じます。すみやかなご回復心よりお祈りいたしております。残りの暑さ、お気をつけ下さい。

(二〇一五・八・二四 長屋璃子)

高志、敏子様 台風のせいでしょうか、涼しくなりました。敏子さんは順調にお過ごしのことと存じます。近くの店の水羊羹を少々、残暑お見舞い代わりにお送り申し上げます。ご笑味下さい。台風荒れの後はきつと暑くなります。御共々お大事に。

(8/24 孝三、芳子)

8月は1日から9日まで孫に会いに兵庫県西宮に行っており14日から22日までお盆休みで息子の家族に続き娘の家族が来ており民宿のおばさん状態で、孫は「来て嬉し帰って嬉し」と言われますが、疲れが出

ました。やっと普段の生活のリズムをとりもどしたところ。送っていただいた「白金葎」を読んで、みちさんの身に起きた異変に驚きました。今頃お見舞いとゆうのも、遅くなり申し訳ありません。今はお身体の状態如何でしょうか？救急車に乗った身として心細かっただろうと記憶が蘇ります。無事手術を受けられ快方に向かわれている由、安堵いたしました。みちさんご養生に専念され一日も早いご回復をお祈りいたします。高志さんもお疲れが出ませんようにご自愛ください。

(H・27・8・27 浅野正美)

光成敏子様 本日すばらしい品物をご恵送にあづかり家内共々非常に恐縮してをります。今後は少し楽をしてください。とにかく異常気象ですから、くれぐれも御身体に御気をつけて下さい。今年中には是非孝三先生と共に御目にかかりたいと思っております。どうもありがとうございます。

(9・11 小山陽也)

古代別便で送りました。同封のお金は会費二千元。毎月のおんびりしています。水曜日武部さん親子と村野藤吾さんの模型を見に行きました。奥様をくれぐれも御大切にしてください。今年中に一度お会いしたいですね。

(9・13 小山陽也)

奥様その後経過ご順調でいらつしやいましょうか。女

性は殿様のようには参りませんので、大切にして差し上げて下さい。当クラブは互選の句会なので誰かがリーダーでもなくあれこれ云いにくい立場なので六十年の句歴でも文法上のことゝなると、むずかしく、悩みのタネでもあります。いろいろご教示下さいませ。

(9・14 長屋璃子)

(お礼とお願い) 先日はお世話になりました。みちさん初め一同元気で、楽しい句会でした。台風が目玉かき分け句の団居 彼岸の墓参りなどあり、仕上がりが遅れて済みません。鑑賞の駄文をお送りします。また、当日、お持ちはぐった、別紙「故美清流を偲ぶ」拙稿を併せてお送りします。半世紀を超える交遊でしたので、遺句妄選のほかに、追悼の句を添えました。適時適宜にお計らいください。さすがに秋気ゆきわたるとはいえ、何分にも異常気象、ご夫妻、呉々も御身お大切に、ご健吟を祈りあげます。草々

(H27・09・23 飯田孝三)

(美清流さん遺句選の追悼号は来月以降に廻します 高志)

九月号用「一句鑑賞」をお送りします。「作品集」は校正を終り次第返送します。「恋のうたを読む」の続きは目下材料探し中です。以上連絡まで。みちさんお大事に。

(九月二十日 武者昭七)

先日は敏子さんもお元気に回復されていて嬉しく存

じました。手術までなさったのですからなおくれぐれも
ご用心なさいますように。 小生もあの暑い時期に炎
天寺のほかに四つほど見届けたい展覽会があつて出歩
いたところ、疲れが出たのか左腕が上らなくなり今頃
なつて「五十肩」という診断で、なにことも晩生だと嘆
いております。それではまた。(24日陽一)

受贈誌 (H27年9月号)

晴耕雨読キャンプ地を管理して (彩124号) 平野ひろし

走り根の百物語 語木下闇 (〃) 〃

八月の巣箱のしんと穴一つ (〃) 〃

修道女自給自足の畑を打つ (飛行雲76号) 駿河岳水

佐久走る移動図書館麦の秋 (〃) 〃

大樹海夏雲の影渡りゆく (〃) 小倉絹江

炊きたてのほか弁買つて麦の秋あすか9月号 山尾かづひろ

星の数増える刻なりちちろ鳴く (東京クラ9月) 文男

杉の秀の孤高に潜む愁思かな (〃) 璃子

こだま

釣られたる鮎に交代 鮎 (飛行雲76号) 光成高志

花びらの重なり捲れ薔薇開花 (彩124号) 〃

釣られたる鮎に交代 鮎 (〃) 〃

恋の歌を読む

その六

武者昭七

閑吟集

閑吟集は中世に流行した小唄を集めたものです。庶民
の哀歓が庶民の言葉でいきいきと詠われていて十分に
僕らの共感をさそいます。

あまり言葉のかけたさにあれ見さいなう空行く雲の早さよ

あの子になんとかして言葉をかけたい。話をしたい。勇
気をふるってかけた言葉はなんと、胸の思いとは全然別
の天氣の挨拶。「まあ見てよ、あの雲の足の早いこと！」
それでも気が晴れたのです。恥じらいがちだったあの頃
が誰にもあつたはずです。そんなことを思い出させるう
たです。「なう」は相手の同意を求めることば。

文は遣りたし通ふ心の物を言へかし

文を遣りたいと思うのだけれど手立てがない。(字が
書けなかったのでしょうか、当時はそんなひとあつた
はずです。それともほかにわけがあつたのでしょうか)
しかし心は通じているはず。こころよ、行つて伝えてよ。
私の思いを。

一夜馴れたが名残り惜しさに出でて見たれば沖中に
舟の速さよ、霧の深さよ

北国の通いの舟の足しげく日本海を渡っていたころ
は風待ちの港などには春をひさぐ女性たちが多くいま

した。一夜妻と呼ばれました。たった一夜の出会いであつたけれどあのひとが忘れられない。せめてと出て見れば舟はもう深い霧に隠れて見えないのです。船足の速さが憎い。霧が憎いというわけです。同様のうたに次のようなものがあります。

後影を見んとすれば霧がなう朝霧が

次のような愉快なものもあります。

えくぼの中に身を投げばやと思へど底の蛇が怖ひ

最後に極め付けを。

何せうぞ、くすんで一期は夢よ、ただ狂へ

芭蕉の軽み以後 (41)

光成高志

文学好きの大名、内藤風虎が俳諧を嗜むようになって、維舟・宗因・季吟といった大家と交渉をもつようになり、風虎の第一撰集『夜の錦』が成立したのは、寛文六年である。この原本は現存しないが、その中から抜粋した句を集めた『詞林金玉集』(延宝七年)が残されているので、これからこの撰集の大きさが想像できる。すなわち、一〇一四句が抜粋されていることから見て少なくともこれ以上の句が載せられていたのだ。又、五句以上収録されている作者は四八名となっている。顔ぶれをみると、先の大家につながる上方の俳人たち、風虎の地元岩城・二本松などの奥州の俳人たちの二つに分かれる。芭蕉が

江戸に下った寛文十二年以後風虎サロンは活発になり、延宝二年に風虎の第二撰集『桜川』が編集された。編集の任に当たったのは季吟門下の松山玖也である。彼は風虎と同じ年で馬が合ったらしく風虎の信頼を得て、『夜の錦』に続いての編集責任者であった。彼の書いた編集の由来を記した跋を要約すると、――『夜の錦』が成つて以後各地から集まる句が跡を絶たないので、再び募集して一万句をこえる数となつた。これらを古書百二十七部に照らして等類同意の句を除き七〇三六句を選んだ。さらに言葉を継いで「いにしへより連俳の書、九の牛の汗すべきまでおほかれど、かもねんごろなるたぐひやある」と自画自賛している。『桜川』の作者は八・一五人である。京の作者一〇八人、大阪八五人、岩城・二本松一一五人、江戸四人である。芭蕉との関係では、奥の細道に出てくる須賀川の相良等躬はこの『桜川』に一二句も入集しており、風虎と地元で交渉があつたのであろう。おそらく、桃青は風虎サロンで等躬と顔見知りであつたものと思われる。

元々俳諧は京大阪で盛んであつて、江戸俳壇はきわめて小さい存在であつたが、延宝三年以後の数年間に驚くべき発展は見せたのである。この盛行を作つたのは、はからずも、文学好き大名の内藤風虎であつた。延宝五年桃青三十四歳、風虎主催の「六百番俳諧発句合」に二十

句をもって参加、勝九、負五、持六であった。先に解説した桃青の発句は主にこの句集のものである。風虎サロンに出入りする若い俳人達はすべて京都の貞門系で、たとえば、高野幽山や小西似春が中心人物であり、桃青はこの幽山一派にあった。延宝六年に幽山編の『江戸八百韻』に似春、桃青は加わらなかった。はや独立した俳風を作りつつあったのだ。

芭蕉の軽み以後 (42)

光成高志

唐黍や軒端の萩の取りちがへ 桃青(六百番詰発句合 延宝五年)

源氏物語の空蟬のもじりである。光源氏が空蟬の部屋に夜這いして、代わりに寝ていた軒端の萩を空蟬と思い取り違えて契ってしまった話を俗化した。軒端の萩は人名であるが、植物の萩にして、唐黍が軒端の萩と取り違えてしまったという卑俗な話にした。唐黍と萩はよく似ているところからの発想である。光源氏を下敷きにしてるので滑稽さがある。俳諧になっているのである。右に書いた出典を縮めて「六百番句合」と略称するが、これについて壇上正孝氏の研究がある(昭和三十七年国語教育論考)。これへの出句者は六十人で左右二十人ずつ分けられ整然とした組み合わせ一覽表に○×△が付けられたものは壯観である。桃青は右方の26番目に配されており、上等の待遇を受けたという位置ではない。桃青の

成績は九勝五敗六分であって、他の人に比べ随分良い成績であった。これは何を意味するのかを考えてみると、主催者の風虎の勝十八負〇持二と露沾の勝十六負〇持四は親子であるから別格である。勝一〇以上あげているのは正立と春澄の二人だけである。正立は、判者の季吟の子息であるから、また別格である。風虎という俳諧好き大名の遊びであるからこれは仕方がない。それらを除くと、幽山、似春、桃青の三人だけが勝九である。桃青の勝九は右方の最多勝の成績である。春澄、幽山、似春、桃青はいずれも維舟・季吟という貞門につながる点で共通している。句合は多分に遊戯的な性格を持つとは言え、句の優劣が勝ち負けの直接の判定材料になるものだから、作者の社会的地位のみで決まるものでないのは云うに及ばない。桃青が、大家・先進にまじってこのような成績をおさめたということは、桃青の力量が認められたということであり、先輩格の幽山や似春に伍して風虎の文学サロンの中心人物たる資格を与えられたことを意味している。幽山は

桃青を三年前に執筆し、ひの役として雇ったので

白金霞 第55号 平成27年9月発行
編集・発行人 光成高志(In & Fax 04・7187・1068)
発行所 〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字…加納綾女。写真9月25日の白金霞

あるから、この時はもう俳諧の実力は同等になっていたのだ。

我孫子日記

8/20	退院迎え
9/2	* 達磨寺&洗心亭
9/7	*2 苑田病院 &炎天寺 御礼参り
9/10	再診付添
9/13	*3 墓地見
9/18	例会

* 病後の妻南瓜切つてと言ひて寝る
洗心亭吾が前よぎる秋の蛇
高志

*2 おはぐろについてタウトの思惟の径
お礼参り八幡さまは秋祭
" " "

病み上がり秋の蚊の嗅ぎに来る
凌霄花のうぜんを頭に載せる石蛙
みち

*3 萩の穂の揺るる篠籠田した西光院
それそれに多少傾く曼珠沙華
高志
みち

編集後記

お便りを沢山頂きまして有難うございます。お蔭で
20 頁に編集できました。